

Schuster, Julia, 2021, "A Lesson from 'Cologne' on Intersectionality: Strengthening Feminist Arguments against Right-Wing Co-Option," *Feminist Theory*, SAGE Publications, 22(1): 23-42.

ユリア・シュースター, 2021, 「「ケルン」の事例からみるインターセクショナリティについての教訓——右派の吸収に抗いフェミニストの主張を確固たるものにする」

※ ( ) の数字はページ数を表す。

### レジュメ作成者による紹介文

Julia Schuster はオーストリア・リンツのヨハネス・ケプラー大学 Women's and Gender Studies に所属している。近年の論文は、フェミニズム理論、労働市場における女性差別、オーストリアにおけるエスニック・マイノリティ差別などを題材としている。

本論文は、2015 年の大晦日にケルンで起こった性暴力事件についての主要メディアの報道に対するフェミニストの反応を分析し、インターセクショナリティ概念を適用したことによって、フェミニストの主張に矛盾が生じたことを主張している。

## 1. 導入 (24-25)

- 本稿は、2015 年の大晦日にケルンで起こった女性に対する性暴力 (以下「ケルン」) を題材とし、「ケルン」についての主要メディアの報道に対するフェミニストの反応についての分析を示す。その際、インターセクショナリティ概念が適用されることに特に関心を払う。
- 本稿は、右派言説において、ますます多くのフェミニストの要求が吸収されているという現象によって動機づけられている。
  - 吸収 co-optation とは、吸収されたアジェンダが「否定されず、しかしその当初の意味が変容し、異なる目的のために利用される」実践のことを指す。
    - ◇ 例えば、政治的右派によって表明されるイスラム嫌悪的で人種差別的な感情は、女性のエンパワーメントと安全についての懸念を伴っており、ムスリム・コミュニティを、女性嫌悪的でヨーロッパの女性にとっての脅威として描いている。このような疑似フェミニスト的主張は、フェミニストの事柄について本当に関心を持っている人々の意見を消し去ってしまう。それゆえ本稿は、どうすればフェミニストの主張が、勢いを増す政治的右派よりも力を持ちうるのかについて関心がある。この問いを検証するにあたり、「ケルン」は格好の分析対象である。
- 本稿は、「ケルン」の文脈でインターセクショナリティ概念を批判する一方で、この概念を捨て去ることを目指すのではない。

- なぜなら、インターセクショナルリティ概念は社会正義のためのアジェンダを支援する可能性を持つからである<sup>1</sup>。
  - しかしながら近年インターセクショナルリティは、ジェンダーと政治学の研究において「絶対に触れるべき用語 a must」となっており、「方法論では適用しないが、一応インターセクショナルリティに言及しておく」という弊害を研究者たちにもたらしている。
- 以下に本稿の構成を示す。
    - 第2節では「ケルン」の事件を説明する。第3節では分析手法を示す。第4節では主要メディアによる報道に対するフェミニストの反応を示す。第5節ではインターセクショナルリティの理論的基礎を確認し、続く第6節では「ケルン」へのインターセクショナルリティの適用がなぜ得策ではないのかを論証する。最後に第7節でオルタナティブな概念としてフェモナシヨナリズムを提案する。

## 2. 「ケルン」とその妥当性 (25-27)

- 事件の概要
  - 2015年の大晦日にケルン中央駅と近接するケルン大聖堂のエリアを通りかかった女性たちによって、数多くの性暴力が報告された。警察や議会の調査委員会の報告によると、容疑者は「主にアラブまたは北アフリカ系の若い男性」であった。2016年1月4日から20日にかけて、ドイツのテレビ局ARDとZDFのニュース番組は、「ケルン」について97回報じた。
- 本稿は、Hark and Villa (2017: 23)を援用し、「ケルン」を「議論を呼ぶ事実」とみなす。すなわち、「ケルン」は特定の政治的文脈のなかに位置づけられ、その意味は事件に付随するメディア報道や学術的分析といった外在的要因によって形成されるものとして捉える。以下では、当時の政治的状況を確認しておきたい。

---

<sup>1</sup> ブラック・フェミニズムに起源をもつインターセクショナルリティ・アプローチは、複数の社会的カテゴリーの交差 intersection によって生じる権力関係が、個々人の社会的立場や日常的経験にどのような影響を及ぼすのかを検討する。とりわけ人種、階級、ジェンダー、セクシュアリティ、国籍、障害の有無、エスニシティ、年齢などの数々のカテゴリーを、相互に関係し形成しあうものとしてとらえる点に特徴がある (Collins and Bilge 2020=2021: 16)。その学術的起源としては、Kimberly Crenshaw (1989) の論文「Demarginalizing the Intersection of Race and Sex: A Black Feminist Critique of Antidiscrimination Doctrine (=周縁をマッピングする——インターセクショナルリティ、アイデンティティ・ポリティクス、ウィメン・オブ・カラーにたいする暴力)」が挙げられる。Crenshaw は、ジェンダーと人種が別々のカテゴリーとして扱われる結果、黒人女性がフェミニストと反人種主義者の両方の理論と政治において周縁化されてしまうという傾向に注意を促し、ジェンダーと人種の両方を考慮に入れ、それらの相互作用がいかにして黒人女性の経験を形成するのかに着目する必要があると主張した。

- ・ 2015年のドイツとオーストリアの政治において移民は重要なテーマであり、その年にドイツ政府は約890000人もの亡命希望者を受け入れた。政治的右派は難民受け入れ政策を批判すると同時に、「ケルン」の事件を彼らの主張を裏付けるものとして利用した。彼らは、メルケル首相の「ウェルカム・ポリティクス」が、ミソジニーや暴力に傾倒する「イスラム文化」をヨーロッパに持ち込んだのだと考えた。
- ・ 「ケルン」の事件を受け、ドイツでは難民受け入れを規制する法律が制定された。このような規制的な法律は、「ケルン」だけではなく、前年の政治的情勢を反映したものである。しかしながら「ケルン」は、右派政治家によって規制的な法整備を加速するために頻繁に利用された。
- ・ 以下の分析では、フェミニストの声が右派の政治にどのように応答したのかを示す。

### 3. 手法 (27-29)

- ・ 本稿は、「ケルン」に関するフェミニストによる25のテキストを分析対象とする。全てのテキストは2015年の大晦日から7ヶ月以内に公開されたものである。
  - ・ 分析のためのテキストを決定するために、まず「ケルン」に対するフェミニストの反応についてオンライン上で幅広く調査し、ドイツとオーストリアのフェミニスト雑誌についても調査した。そのなかから選定した分析のためのテキストは、以下の3つの基準を1つ以上満たしている。(1)主要なフェミニストメディア内で公開されたもの、(2)名声のあるフェミニストのジャーナリスト／学者によって書かれたもの、(3)上記の段階で選ばれた著者たちと異なる属性を持つ著者によって書かれたもの。これら基準に基づき、日刊／週刊新聞で公開された社説やコラムのなかから25のテキストを選定した。
  - ・ 筆者のうちほとんどがヨーロッパ系の白人であり、少なくとも2人が有色人種であった。出版／メディアの発信源に関しては、14がドイツ、11がオーストリアを基盤としており、全てのテキストはドイツ語で書かれている。

### 4. 「ケルン」に対するフェミニストの反応 (29-32)

- ・ ステレオタイプの使用に対する批判
  - ・ 包括的な合意としてみられたのは、主要メディアによる「ケルン」のフレーミングの仕方についての批判である。主要メディアによるフレーミングは、ヨーロッパの白人女性の脅威として想定される色黒の北アフリカ／アラブ／ムスリム／難民男性についてのステレオタイプを使用しているとして、フェミニストたちによって批判された。
  - ・ 25のうち7つのテキストが主に批判するのは、メディアが性暴力や被害者の経験について議論するよりも、加害者の民族的、宗教的そして／または難民のバック

グラウンドに焦点を当てていたという点である。さらに、事件のこのような描写は、女性に対する性暴力が、「他者による性差別」の表れであるときのみメディアで議論され、自身の文化内で起こった時には語られることがないという一例として批判された。これらのフェミニストの主張は、性暴力は文化特有のものではなく、むしろ通文化的な問題であることをはっきりとさせた。

- 難民に関するモラル・パニックの誘引
  - ・ 15 のテキストは、主要メディアの「ケルン」に関するナラティブが、ドイツとオーストリアに新たな脅威をもたらすと想定された難民に関するモラル・パニックを誘引したと結論づけた。このことに基づきフェミニストたちは、メディアが「全ての難民に疑いをかけることによって、制約的で、非人間的で存在を脅かすような政策が制定された」と分析し、そのためメディア報道は政治的右派を支援したのだと主張した。
- インターセクショナルリティを導入する必要性
  - ・ 25 のテキストの中で最もよく見られた訴えは、メディアと政治家は、人種差別と性差別の交差的 intersectional な絡み合いに注意を払うべきだというものである。
  - ・ この要求が的をえていないという本稿の主張を説明する前に、以下インターセクショナルリティ概念について簡単に要約する。

## 5. インターセクショナルリティ (30-32)

- インターセクショナルリティは、数えきれないほど多くの概念化がなされてきた。本研究で分析したテキストのほとんどが学者に向けて書かれたものではないため、著者たちはどのバージョンを適用したのかを明示していない。したがって本稿は、「ケルン」の文脈で恐らく使用されたであろう、インターセクショナルリティの理解を説明することとする。
- インターセクショナルリティを提唱した Kimberle Crenshaw (1989, 1991) は、人種差別と性差別の交差に位置する黒人女性がいかに、どちらの差別の形態においても「典型的な」犠牲者としてみなされることなく、結果的に反差別的なアプローチのなかで存在が見落とされていることを明らかにした。インターセクショナルリティは当初黒人女性の経験に焦点を当てていたが、その焦点はそのほかの複合的に周縁化されている集団へと広がっていった。
- 複合的に周縁化されている集団以外について言及するためにインターセクショナルリティを拡張する論者もいる。ここでは、インターセクショナルリティはもはや性差別や人種差別といった差別の軸の交差だけを指すのではなく、ジェンダーや人種／エスニシテ

ィといったアイデンティティ・カテゴリーの交差をも含む。

- 個人的、構造的、そして言説的な交差の分析を組み合わせたマルチレベルなアプローチを採用するインターセクショナリティ論者もいる。この手法は、個人的な経験の分析と社会的権力関係の分析を繋げることを目指している。
  - ・ このようにインターセクショナリティのアプローチは、分析者が差別のダイナミクスのマイクロ、メゾ、マクロのうちどのレベルに着目するかによって異なる。本稿は、どのアプローチが「正しい」方法なのかを論じることを目的としていない。ここでの著者の主眼は、いずれのインターセクショナリティのアプローチを用いても「ケルン」の状況を説明することはできないことを示すことである。

## 6. インターセクショナリティと「ケルン」？ (32-34)

- フェミニストのテキストは主に2つの批判のポイントを提示していた。まず、①メディアが性暴力を「他の」文化に特有の問題として議論していた点、つぎに、②メディアが全ての難民男性を性暴力の潜在的な犯人とするステレオタイプを作り出していたという点である。本稿はこれらの批判のポイントが人種差別的で性差別的な要素に対処していることは認めつつも、それらの要素が交差的ではないことを主張する。
- ①に関して
  - ・ まず性暴力一般に関する分析は、インターセクショナリティ概念を適用できる。分析の例としては、異なる民族間の女性の暴力に関する経験の比較などが挙げられる。
  - ・ しかしながら移民女性に対する暴力について言及したのは、本稿が分析した25のテキストのうちたったの3つのみだった。全体的に難民・移民女性は、「ケルン」のナラティブにおいてほとんど登場しなかった。反対に、フェミニストたちの主張は性暴力が通文化的な問題であることを強調していた。この通文化的普遍性は、全ての文化の女性が暴力の影響を受け、全ての文化に加害者はいるという、暴力に関する2つの立場を示していることになる。これは交差的な主張ではなく、むしろその反対である。なぜなら、この主張は社会集団間の共通の経験を強調しているためである。
- ②に関して
  - ・ つぎに、「危険な色黒の男」という植民地主義的なステレオタイプは、明らかにジェンダー化され、人種差別的である。白人男性や移民男性といった男性集団の社会的ヒエラルキーを識別するために、インターセクショナリティを適用するのは、有効な手法である。
  - ・ しかしながらフェミニストによる批判は、全ての難民と亡命希望者の名声を傷つ

け、彼らに制裁を加えることを目的として、これらのステレオタイプが利用されているという主張にまで達している。「危険な色黒の男」というステレオタイプは人種差別的でイスラム嫌悪的な問題であるが、交差性に関する問題ではない。

- 本稿がこれまで示したように、インターセクショナルリティの特定の理解は、「ケルン」の切り離された側面を分析することができる。しかし本稿は、女性に対する暴力の分析、人種差別的なステレオタイプの分析、そしてそれらの関係性の分析を含む「ケルン」全体に関する交差的な分析が、一貫性を持たないことを主張する。なぜなら、人種差別と性差別は、それぞれ交差していない「ケルン」の別々の側面に影響を与えているからである。
  - 性差別に関する議論は「ケルン」の事件そのものに言及する一方で、ステレオタイプに関する議論は、事件に対するメディアの反応に言及している。これらは異なる集団に影響を与える異なる事柄である。すなわち、難民はステレオタイプによる人種差別によって影響を受け、駅を通りかかった女性たちは性暴力のターゲットとなった。またほとんどのテキストは、全ての犠牲者が白人ドイツ人女性であり、全ての加害者が非白人の非ドイツ人男性であると想定していた。
  - この白人女性と移民の分離は、「ケルン」に対して取られるべき政治的リアクションについての提案にも反映されている。それらの提案は主に、加害者への適切な処罰と、犠牲者への支援の準備を要求するものだった。難民法の新たな規制を撤廃することや、ムスリムや有色人種の視点を含むことを要求する提案もあった。どの提案も人種差別と性差別の交差を認識しておらず、人種差別か性差別のどちらかの問いに対処するものであった。すなわち全体的に、フェミニストの著者による提案は交差的な解決方法の必要性を反映していない。
  - ここまで本稿は、インターセクショナルリティという概念がなぜ「ケルン」のダイナミクスをうまく把握できないのかを示してきた。以下では、フェミニストの主張にとってインターセクショナルリティの使用がむしろ逆効果をもたらすことになることを説明する。

## 7. もつれた議論 (34-36)

- フェミニストによる「ケルン」の分析の主な2つの目的は、メディアによる難民についての人種差別的なステレオタイプに異議を唱えることと、レイプ文化についてその通文化的特徴を認める形でまっとうな議論を促進することだった。インターセクショナルリティは、それらの目標を達成するためには逆効果をもたらすことになる。なぜなら、そうすることによってフェミニストの主張は矛盾へと陥り、論争空間が生じたからである。
  - フェミニストのテキストは「メディアが加害者の出身や宗教に焦点を当てることにより、被害者の要求という重要な論点から注意を逸らさせた」ことを批判した。

- ◇ この議論の方針は、性暴力の犠牲者への正義を要求すると同時に、難民についてのステレオタイプを明らかにすることを目的とした。このような両方の事柄に同時に対処するという作戦は、人種差別と性差別のもつれを認識することを必要とする分析的なレンズとしてのインターセクショナリティという概念から生じている。
- ・ 問題は、女性に対する暴力と難民に対する人種差別という、もつれあっていない2つの異なる 이슈に同時に対処したことによって、筆者たちが2つの主張を一緒くたにしてしまった点である。さらに、筆者たち自身が、難民と加害者を同一視してしまっていた。難民と加害者の同一視は、暴力を難民の文化の一部であるという主張に異議を申し立てることを意味しないし、女性に対する暴力が加害者のバックグラウンドに関係なく容認できるものではないと主張するものでもない。
- ・ さらに、警察の報告によれば、何名かの被害女性は加害者を「北アフリカ人のような見た目」として表現していた。
  - ・ フェミニストたちが、加害者のバックグラウンドに言及すべきではないと主張することによって、このような被害者は沈黙させられてしまう。被害者の言説が性化された人種差別に加担しうるものであったとしても、この問題はフェミニスト的分析によって慎重に、しかしオープンに議論される必要がある。

## 8. オルタナティブなアプローチ (36-37)

- ・ 本稿はオルタナティブなアプローチとして、フェモナショナリズムという概念を提案する。
  - ・ Puar (2007) のホモナショナリズムという概念をモデルに、Farris (2012、2017) はフェモナショナリズムという概念を提唱した。この概念は「危険な色黒の男」という植民地主義的なステレオタイプを、ヨーロッパ中心的な家父長制の覇権的秩序を維持する生政治 biopolitical のロジックに追随するナラティブのなかに位置づけ、互いに対立する4つのグループ——白人男性、白人女性、非白人男性、非白人女性を設定する。
  - ・ Farris によると、白人女性は「国家の生物学的再生産者」としてみなされる。そのため彼女たちは、白人の国家を再生産するための生物学的な潜在能力を守るために、白人男性によって、性的に暴力的な非白人男性の脅威から守られる必要がある。非白人女性は母親として、移民家族の社会化や統合過程にとって重要である。しかしながら、Farris が指摘するように、非白人女性は白人女性と同じ「必要性」をもって性暴力から守られるのではない。なぜなら、非白人女性は白人男性の欲望のために利用可能である必要があるためである。Farris は、フェモナショナリズムによって4つの集団に割り当てられる異なる役割を説明するために、性化された人種差別と、人種化された性差別という概念を使用する。これはインターセクショナリ

ティのいくつかの形態と類似したダイナミクスを示している。

- しかしフェモナショナリズムはインターセクショナリティとは異なり、女性に対する暴力の事柄がどのように利用されているのかについても説明する一つのナラティブに、4つの役割をリンクさせているため、それぞれの概念[=性化された人種差別、人種化された性差別]を超えた説明を提供する。フェモナショナリズムの核となる点は、フェモナショナリズムが家父長制的な社会秩序を維持していることであり、その秩序において男性たちは、その文化/民族的属性によって女性の保護者か敵かのどちらかとしてみなされる。女性に対する暴力は、男性の両方の役割に内在するメカニズムであり、それらの役割は共に両者を規定している。したがって、フェモナショナリズムのアジェンダにおいては、女性に対する暴力と戦うことに対して関心が払われることはない。

## 9. 結論 (37-38)

- フェミニストの主張を理論化するためにインターセクショナリティを適用するのは得策ではないという本稿の主張は、主に2つの理由に基づく。
  - まず、「ケルン」という事柄を分析するのにインターセクショナリティは不適切である。なぜなら、その適用はレイプ文化が通文化的な現象であるというフェミニストの主張と矛盾し、難民に対する人種差別的ステレオタイプの問題を部分的にしか説明できないためである。
  - つぎに、インターセクショナリティの適用は、「ケルン」をめぐるフェミニストの分析内に断絶をもたらすことになる。この点は特に不幸である。なぜならこのことは、右派が、女性の幸福について真剣に考えているということを偽って主張することと、「ケルン」の性暴力の理由について人種差別的な分析を公に示すことを促進することになるためである。政治的右派は、「加害者のバックグラウンドに固執するな」というフェミニストの不幸な要求を利用し、フェミニストが性暴力の加害者を擁護しているとして糾弾する。そしてフェミニストの主張の信頼性を傷つけることによって、彼らは女性の権利の「本当の」擁護者であると自らを提示する。このように、右派のナラティブは反移民のアジェンダのために「ケルン」を悪用しただけではなく、フェミニズムの信頼を損ねるためにフェミニズムの主張の欠陥を利用して
- 本稿は、インターセクショナリティという概念を抹消することで、右派によるメディア言説の吸収が止まるだろうと主張しているのでは断じてない。しかし、我々は政治的右派にとって有利となる状況を作り出してはいけない。右派はフェミニストの議論における矛盾と論争空間を利用するはずであるから、フェミニストの主張における明瞭性と包括性を高めることが重要である。



【参考文献】

- Collins, Patricia Hill and Sirma Bilge, 2016, *Intersectionality (Key Concepts)*, Cambridge: Polity Press. (下地ローレンス吉孝監訳／小原理乃訳, 2021, 『インターセクショナルリティ』人文書院.)
- Crenshaw, Kimberle, 1989, "Demarginalizing the Intersection of Race and Sex: A Black Feminist Critique of Antidiscrimination Doctrine, Feminist Theory and Antiracist Politics," *University of Chicago Legal Forum*, 140: 139-167.